

審査の結果の要旨

氏名 川瀬貴也

川瀬貴也氏の「植民地朝鮮における宗教をめぐる「眼差し」——宗教政策・植民地布教・学知」は日清戦争前後の日本宗教の朝鮮布教から、1930年代の朝鮮総督府による「心田開発運動」に至るまでの、日本側の宗教政策と宗教集団や宗教研究者の行動を支える言説、また朝鮮側宗教関係者や学者の協力的な態度を支える言説を幅広く研究した業績である。第一章、第二章はそれぞれ一八七〇年代、とりわけ一八九〇年前後から一九三〇年代に至る時期の仏教、キリスト教の集団や個人の布教活動を取り上げ、当該時期の宗教政策と関連づけながら、布教者側の言説の特徴を明らかにしている。そこでは文明の側に立つ者が「遅れた朝鮮」を見下すというオリエンタリズムの「眼差し」が支配的だが、仏教の場合にはそこに同じアジアの伝統を受け継ぐ者同士というアジア主義の言説が顕著に混じり込み、「日本型オリエンタリズム」ともいうべき様相が目立っている。

第三章では一九一九年の三・一独立運動の容疑者の裁判記録を資料とし、被告の立場に置かれた天道教幹部の弁明の中に見られる文明観が取り上げられる。彼らはアジア主義と近代文明観の双方において日本側の言説に親しみ、それらを身につけていたことが知れる。日本型オリエンタリズムの言説に慣れその眼差しを自ら自身のものとするにより、日本への過剰な期待を招き寄せることにもなった。これに対して第四章では、植民地権力の中核と直結する位置にいた学者、高橋亨の言説が取り上げられている。京城帝国大学の朝鮮語学文学講座の教授だった高橋は、朝鮮仏教と朝鮮文化に対して、その停滞性、受動性を極端に強調する典型的なオリエンタリズム的言説を展開した。第五章では、一九三〇年代に総督府が宗教家や知識人を利用して総動員体制を作ろうとする際に行った「心田開発運動」を支える言説が分析される。さまざまな宗教観をもつ学者や朝鮮の知識人をも巻き込んで展開したこの運動は、学問的・宗教論的な諸言説が諸宗教のさまざまな評価を組み込みながら、オリエンタリズムの眼差しを強めるのに貢献していく様を示す格好の資料となっている。

日本の朝鮮支配のすべての時期を視野に入れ、宗教に関わる様々な立場の人びとの言説を多声的に構成しつつ、朝鮮をめぐる日本型オリエンタリズム（植民地主義言説）の諸相を描き出す試みは前例がなく、多くの創見が盛り込まれている。しかし、個々の題材についてはなお既存の研究成果のくみ上げや資料の分析が十分でないところもある。また、全体を貫く諸概念の構成が不十分であり、このために各章の関連づけも明確さを欠いているところがある。とはいえ、宗教をめぐる朝鮮植民地支配の言説構造を解明しようとしたパイオニア的な研究として大きな価値を有していることも明らかである。よって審査委員会は本論文が博士（文学）の学位を授与するに値するものと判断する。